

The Clue of the Rising Moon
1935
by Valentine Williams

目次

月光殺人事件

5

訳者あとがき 259

解説 野村宏平 263

主要登場人物

- ピーター・ブレイクニー……………劇作家。この小説の語り手
トレヴァー・ディーン……………スコットランドヤードの刑事
ヴィクター・ハヴァーズリー……………クンマー酒造所の経営者
グラジエラ・ハヴァーズリー……………ヴィクターの妻
フリッツ・ウォーターズ……………グラジエラの友人
バーバラ・インガースル……………ハヴァーズリーの秘書
チャールズ・ラムズデン……………キャンプ場の経営者
イーデイス・ラムズデン……………チャールズの妻
セーラ・カラザース……………イーデイスの姪
デイヴ・ジャーヴィス……………セーラの婚約者
オスカー・ブレイスガードル……………元医師
ジャネット・ライダー……………ブレイスガードルの友人
ハンク・ウエルズ……………保安官
フレッド・グッド……………州警察の巡査
エド・ウォートン……………無法者

第一章

その出来事はそもそもヴィクターのせいだったのだが、彼はその責任を夫人になすりつけずにはいられなかった。その日の午後、ヴィクター・ハヴァーズリーと夫人のグラジエラ、セーラ・カラザーズ、それとほくの四人で、乗馬に出かけたのだ。広い未舗装道をたどって、キャンプ場から三キロほど離れた地点まで来ると、ラムズデン家の敷地に沿ってカーブを描いている州道との交差点に出た。そこで湖沿いの乗馬道を通じてキャンプ場に戻る代わりに、そのまままっすぐ進もうと主張したのはヴィクターだったのだ。自分は豚のように太っているから、運動しなければならぬのだと言って。アスファルト道路を横切って、初めて来た道に入っていくと、ヴィクターはすぐに馬を速足で走らせ始めた。その後をぼくたち三人が馬の足音を響かせながら追う——アンデイ号に乗ったセーラ、ジェスター号のぼく、ホタル号のグラジエラだ。ホタル号はラムズデン家の当主チャールズ・ラムズデンの愛馬だが、この美しい栗毛の牝馬に乗ることを許されているのはグラジエラだけだ。

ヴィクターが乗るブラックプリンス号はスピードを上げて、ぐんぐんみんなを引き離す。と、突然ブラックプリンス号が後脚で立ち上がった。驚いたアンデイ号が飛びのき、馬の背からセーラが投げ出された。セーラは膝を打ち付けたものの、すぐに立ち上がった。ぼくのジェスター号は警察馬みたいに静かに立っていたので、ぼくはアンデイ号の手綱をつかんだ。視野の隅で、ブラックプリンス号

が後脚を上げて飛び上がるのが見えた。ほくの背後ではホタル号がおびえて鼻を鳴らし、グラジエラの「どうどう。大丈夫よ」となだめる声が聞こえた。

セーラは大丈夫だと言って、ほくの手からアンディ号の手綱をつかんだ。ヴィクターが怒鳴り声を上げる。「この野郎。死にたいのか。あんな茂みから突然出てくるなんて、どういうつもりだ？」

ほくはジェスター号に回れ右させた。短気そうな男が小道に立っている。骨張った顔に無精ひげをはやし、もつれた髪、シャツにズボンといういでたちで、手にはバケツを持っている。「でたらめ言うんじゃないぞ」男はどなり返した。「ここはおまえの道じゃないだろうが」

ヴィクターは返事もせず、ブラックプリンス号をくると反転させると、こっちに戻って来た。馬が急に動いたため、男は道路脇に飛びのいたが、そうでなかったら馬に踏まれていたかもしれない。男が恐ろしい剣幕で道に戻って来たので、ほくはジェスター号の横腹をかかとで蹴って、男の方を向けさせた。

「カッカするなよ、兄弟」ほくは言った。

男は切れ長の黒い目でほくをにらみつけ、歯を剥き出しにしてすごんだ。「あいつは何様のつもりだ？ あんな風に人を馬で蹴散らすなんて」

「放っておこう」ほくは男をなだめた。「あいつはあのご婦人の手当をしたいんだよ。あんたが馬を驚かせたせいで、彼女は馬から投げ出されたからね。さあ、もう行けよ」

男はほくをにらみつけていたが、転がっていたバケツを手にとると、何も言わずに小道を横切って林のなかへ歩き去った。

ヴィクター・ハヴァーズリーは馬から下りると、セーラを抱き寄せ、本当に大丈夫かと訊ねた。ほ

くはグラジエラをチラリと見た。ところが彼女はあぶみ（鞍（鞍の両脇にさげてある））を調整して、二人に気づかない。ぼくはヴィクターに注意した。「知らない人を相手にするときはもっと注意しろよ、ヴィック。手強い相手だったぞ」

ヴィクターは小ばかにしたような笑い声を上げた。その笑い方はいつもぼくをイライラさせる。「手強いだ」と？ どういう意味だ？」

「あいつは無法者だ」

ヴィクターはセーラの肩にまわしていた腕をほどくと、まるで銃で撃たれたみたいに慌ててこちらを振り返った。「無法者？」眉をひそめて、ぼくの言葉を繰り返した。「まさか。ピート、冗談だろ」
「冗談なわけないだろ。あいつは足を前に踏み出しながら、左の脇の下に手をやった。気づかなかつたのか。ああいった輩はあそこに銃を隠し持っているんだよ。おそらくコートを着ていると勘違いして、つい手をやったのだろう」

ヴィクター・ハヴァーズリーは、もはやセーラどころではない様子だ。呆然とした目つきで妻のグラジエラを見つめている。

「ばかなこと言わないでよ、ピート。無法者がアディロンダック山地で何をしようというの？ こんな辺鄙な場所です？」とグラジエラ。

ぼくは肩をすくめた。「ジェイク・ハーパーのところで夏を過ごす滞在客じゃないかな」

ヴィクターは何も言わなかった。代わりに妻のグラジエラが口を開いた。「ジェイク・ハーパーって？」

以前、村の保安官ハンク・ウェルズからジェイクの話を知ることがある。くたびれた感じの粗野

な農夫で、相当な悪党だそうだ。禁酒法時代には、カナダとの国境付近で酒の密輸に関わっていたらしい。ハンクによると、森にあるジェイクのあばら屋、すなわちこの裏側は、怪しげな訪問客のたまり場だそうだ。ぼくがその話をする、ハヴァアズリーは顔を真っ赤にして妻を振り返った。

「そんな話は聞いてないぞ？」顔を真っ赤にして聞いてみる。「チャールズ・ラムズデンはどうして警告してくれなかったんだ？」

グラジエラは肩をすくめた。「まさか私たちが敷地の外に出るとは思ってたんでしよう。私だって、敷地から出たことに気づかなかったもの。いずれにせよ、こんな遠くまで来なくても、ウルフ・レイクには乗馬を楽しめる場所がたくさんあるじゃない」

一生懸命馬に乗ろうとするセーラに手を貸そうともせず、ハヴァアズリーは自分の馬によじ登って鞍にまたがった。「きみはおれを本気で気遣っているのか？ 本気なら知っていて当然の情報だろうに」厳しい口調で毒づく。「おれに運動しろとうるさく言うくせに、いざおれが運動すると……」ふと、ハヴァアズリーは口をつぐんだ。「あの男はどうしてここにいたのか。あいつは無法者だろ？ 雇われの殺し屋じゃないか……」

グラジエラは、ハヴァアズリーを落ち着かせようと、手袋をした手で彼の袖をつかんだ。「何を言うの、ヴィック。まさか真に受けてないでしょうね？ きっとただの浮浪者よ。ピートは大きさに言いたがるんだから。だから作家になったのよ。ね、ピート？」

グラジエラは、夫の肩越しにぼくに目配せした。その意図を読み取ったぼくは、すぐに助け船を出した。「そうだな、確かにちよつと想像力をふくらませすぎたかもしれない」そして声を立てて笑った。「戯曲を書くときの悪い癖だな。つい芝居っぽく大げさに話したくなってしまつて。それに、ハ

シクの話の鵜呑みにする必要はない。保安官の目には、よそ者はみんな村人のモラルを乱す輩に見えるのさ」

しかしヴィクターの機嫌は直らない。「何とでも言えるだろうよ」辛辣な口調に戻っている。「大げさかどうかはともかく、おれが危険にさらされるとは思わなかったんだろ。きみが恍惚とした表情で一日中ぼんやりしていた理由がわかったよ」

日に焼けた彼女の頬に赤みがさして、小声で抗議する。「やめて、ヴィック」だが、ヴィクターはブラックプリンス号の脇腹を突くと、来た道を駆け足で戻った。ぼくは馬から下りて、セーラが馬に乗るのを手助けした。それからどんだん遠のいていくヴィクターの後ろ姿を好奇心の目で見つめた。彼は何かに怯えているようだ。突然あんな嫌みを言ったのは、恐怖心を隠したかったのだろう。だが、それが何かはわからない。ハヴァーズリーがノイローゼから回復しつつあるのは確かだ——いや、彼のためにあいまいな表現を使ったが、実はアルコール依存症だ。だが、今はウイスキーをかなり控えているそうだ。ごろつきと遭遇したからといって、あんなに取り乱す必要があるのか？ グラジエラが恍惚とした表情で一日中ぼんやりしていたとはどういう意味だろう？

セーラが馬に乗ると、アンデイ号は待ちかねたように、ブラックプリンス号の後を追って弾丸のように駆け出した。ホタル号もその後続きたそうに小躍りしたが、グラジエラは後を追おうとはせず、ぼくが馬に乗るのを待っていた。ぼくたちは一緒に帰途に就いた。

第二章

ぼくはヴィクター・ハヴァーズリーをたいした人物だとは思っていない。だが、彼に嫉妬しているのは確かだ。富でも何でも持っているうえに、グラジエラを妻にしたからだ。年齢はぼくと同じ四十五歳。だが、ぼくが肺病患いの貧乏作家なのに対して、ヴィクターは裕福で精力的で、イリノイ州にある酒造所の経営もうまくいっている。戦争が終わって以降ぼくはついていかなかったが、ヴィクターときたら——まったく運のいい奴め。チャールズ・ラムズデンの話では、ヴィックの財産はもととは義父のものだったという。彼の母親は、酒造所の経営者のヘルマン・クンマーと二度目の結婚をした。クンマーが亡くなるとその事業を引き継いだが、その母が亡くなると、今度はその会社の社長だったヴィックがクンマーの莫大な遺産を受け継いだのだ。

グラジエラのことを思うたびに、ぼくはヴィックの経済力がうらやましくなる——ぼくにヴィックの年収の百分の一でもあれば、グラジエラのような女性を幸せにできるだろうに。何度そう思ったことか。その日の午後、森のなかを馬に乗って駆け戻りながら、グラジエラと打ち解けて話すのはこれが初めてだと気づいた。この二週間の間と一緒に乗馬をしたり、泳いだり、ブリッジをやったりして遊んだというのに。厳密に言うと、ぼくは招待客ではない。ラムズデンが所有する湖畔の掘っ立て小屋を借りているのだ。週に数回、ラムズデン家に昼食や夕食に呼ばれるときを除いて、ぼくはいつも

その小屋で眠り、執筆し、食事を取る。朝は戯曲を書き、昼食の後ぶらぶらとラムズデン家の母屋へ行って、みんなに合流する。とはいえ、ぼくはグラジエラと二人きりにはなれない運命らしかった。

——彼女はパーティでは引つ張りだこで、彼女とは大勢のなかでしか話せそうにないと思つたほどだ。ぼくは人の外見を描写されても何とも思わない。だからグラジエラの容貌を描こうとは思わないが、あえて表現するなら明るい金髪とつややかな肌に、はかなくきらきら輝くような雰囲気を持つ女性だ。ガラス工芸家リックがデザインするガラス細工のようなイメージでも言おうか。美しさという観点だけで言うなら、鹿のような瞳と赤褐色の髪、魅力的な容姿を持つセーラの方が美人だと思う。セーラは、二十八歳のグラジエラよりも二、三歳ほど年上だ。セーラの方がずっと洗練されていて、活発で、今時のニューヨーカーといった感じだ。良家の出身だったが、世界恐慌によつて一族が多大な損失を被つたため、今や彼女はマディソン・アヴェニューで小さな店を営む友人を手伝っている。

他方でグラジエラには独特の気品があり、その姿勢と身のこなしは美しく優雅だ。カメオのように際立って見える。グラジエラと会つた人は、その容姿よりも、彼女の独特な魅力を思い出すのではないか——今となつても、彼女の静かな瞳の色をうまく描写できない。あの魅力を具体的には説明できないが、誰だつて彼女と話したくて仕方がなくなるだろう。グラジエラが到着したあの夜、母屋の大きな居間で初めて彼女を見た瞬間から、ぼくは今までに出会つたどの女性よりも彼女を好きになつた。

国道を渡つた後、ぼくは彼女に追いついて馬を寄せた。「ヴィックはどうかしたのかい？」

グラジエラは夢から覚めたみたいにはつと驚いた。「彼は病人なのよ。春にノイローゼになつて、まだ回復しきつていないの。かかりつけ医からも、すぐに転地療養させないと、病状がどうなろうと

責任は取れないと言われたわ。ああ、そうだ」グラジエラは笑みを浮かべてぼくを見た。「さつきは話を合わせてくれてありがとう」

「ヴィックは死ぬほど怯えていたね。どうしたんだろう？」

グラジエラは肩をすくめた。「ヴィックはかなりの資産家でしよう？ だから見知らぬ他人にピリピリするのよ。私たちが住むシカゴ近郊は治安が悪いから、つい警戒してしまうのだと思う」

「かもしれない。だとしても、あんなふうにあなたを怒鳴りつけるなんて」

グラジエラは、ホテル号の毛づやの良い尻に鞭を軽く振り下ろし、ちよっと肩をすくめた。

「あなたはまだ若い」ぼくはなおも食い下がった。「あなたには幸せになる権利がある。どうしてあんなかんしゃく持ちに我慢してるんだい？」

彼女は「もう慣れっこだから」と言わんばかりに肩をすくめてみせた。

「ぼくには口出しする権利はないよ。でもね、グラジエラ。ぼくはあなたが好きだし、あなたが人生を台無しにするのを見たくない。あなたとヴィックでは、どう見たって釣り合わないじゃないか」

グラジエラは澄ました顔で首をかしげた。「そうは思わないわ。いずれにせよ、私は彼に満足してるわ。ヴィックには私が必要なのよ。ほら、彼はあまやかされて育ったじゃない。一人っ子のうえに、幼少の頃に父親を亡くしたから。お母さまはクンマー氏と再婚して大金持ちになり、ヴィックをさんざんあまやかした。時々彼がかわいそうになるのよ——少年みたいな人だから、誰かが世話を焼いてあげないと……」

「ああ、せいぜいスリッパでお尻を叩いてやってくれよ。いつか誰かが、あなたの少年のあごに一発お見舞いするだろうよ」

恋愛群像劇と謎解きが融合した Doyle 風味 クリステイマー型 ミステリ

野村宏平（ミステリ研究者）

作者について

ヴァレンタイン・ウィリアムズという名前を聞いてピンとくるようであれば、相当のミステリ通と
いっていいだろう。戦前には『月光殺人事件』のほか二つの長編と短編数作が紹介されたものの、戦
後の翻訳はセイヤーズやクロフツらと共作したりレー小説『ホワイトストーンズ荘の怪事件』がある
のみ。筆者は本稿執筆にあたって、日本で発行された海外ミステリ作家事典の類を十種あまりあたっ
てみたのだが、「ヴァレンタイン・ウィリアムズ」の項目を見つけたことができたのは、中島河太郎
の『推理小説展望』（東都書房〈世界推理小説大系〉別巻、一九六五年）に収録された「海外推理作
家事典」のみだった（※1）。そのほか、ハワード・ヘイクラフト『娯楽としての殺人 探偵小説・
成長とその時代』（林峻一郎訳、国書刊行会、一九九二年）の訳註や長谷部史親の『探偵小説談林』
（六興出版、一九八八年）などで紹介されているが、現代の日本では完全に忘れ去られたといっ
ていい存在である。

とはいえ、けっしてマイナーな作家だったわけではなく、本国イギリスでは戦前を中心に三十冊以上の著作が刊行されている。ウィリアムズの経歴については本書の「訳者あとがき」に詳しいのでここでは省くが、彼の小説で代表作とされているのが、ゴリラのような巨体を持つドイツのスパイ、アドルフ・グラント博士のシリーズである。

グラントは第一次大戦中、ドイツ皇帝直属の秘密探偵長としてあらゆる邪悪な計画を実行した怪物で、片足が蟹の足のように曲がっていることから「クラブフット」と呼ばれる。日本では昭和初期、シリーズ二作目の長編『The Return of Clubfoot だけ』が『蟹足男の再現』『海老足男の復活』『蟹足男』というタイトルで三度も訳されているが、その内容は、イギリスの快男児デズモンド・オークウッド少佐が南海の孤島で宝探しに挑む通俗的な冒険スリラーで、グラントは敵役として登場する。グラントが登場する作品は全部で七作あるが、フレイドン・ホヴェイダは『推理小説の歴史はアルキメデスに始まる』（三輪秀彦訳、東京創元社、一九八一年）のスパイ小説の項でこのシリーズに触れ、「追跡とサスペンスとはかなりうまく処理されている。しかしバカンやアンブラーからは遠いものだ」と評している。

このシリーズの影響もあってスパイ・スリラー系の作家に分類されることが多いウィリアムズだが、謎解きを主眼とした本格ミステリもいくつか残している。本書『月光殺人事件』もそのひとつだが、邦訳された短編のなかでは、「状況証拠」「マーレス嬢の失踪」「見えざる刺客」などにも本格マインドが感じられる。逆に、小酒井不木が訳した長編『真夏の惨劇』は展開こそ本格ものを装っているが、最終的にアンフェアな形で解決されるので、あまりお勧めできない。

シリーズキャラクターも多く、グラントやオークウッドのほか、本書で探偵役を務めるスコットラ

ンドヤードの若き刑事トレヴァー・デイン、生真面目な努力型探偵のマンダートン警部、仕立て屋としての顔も持つ私立探偵レッドゴールドらがいる。彼らはそれぞれ単独で主役を務めることもあるが、共演するケースもみられ、たとえば短編「虹の秘密」ではトレッドゴールドとマンダートン警部が協力して捜査にあたり、オークウッド少佐がトレッドゴールドの友人としてゲスト出演している。恋愛要素を積極的に取り入れているのもウィリアムズ作品の特徴だ。「蟹足男の再現」はロマンス色が濃厚だし、『真夏の惨劇』や短編「裁判長の悩み」では痴情のもつれがモチーフになっている。「ホワイトストーンズ荘の怪事件」で恋愛要員として新キャラクターを投入したのもウィリアムズだった。それら諸作品のなかでも、謎解きと恋愛がもっともうまく融合しているといえるのが『月光殺人事件』だろう。

『月光殺人事件』について

本作『月光殺人事件』はクローズドサークルというわけではないけれども、舞台と容疑者が限定されるシチュエーションで発生した殺人事件を天才型の名探偵が解き明かすという、きわめてオーソドックスなスタイルの本格ミステリである。大きな事件はひとつしか発生せず、動きのあるシーンも少ないので地味な印象は拭えないが、それでも物語に引き込まれてしまうのは、個性的なキャラクターたちが織りなす複雑な恋愛模様が牽引力となっているからだろう。

物語の語り手である四十五歳のピーター・ブレイクニーは元軍人で第一次大戦中に毒ガスを浴びて肺を患い、後遺症に苦しんだ経験を持つ劇作家——同大戦中に重傷を負って除隊した作者の姿が多分

〔著者〕

ヴァレンティン・ウィリアムズ

本名ジョージ・ヴァレンティン・ウィリアムズ。別名義にダグラス・ヴァレンティン。1883年、英国ロンドン生まれ。ロイター通信や『デイリー・メール』紙のジャーナリストとして活躍し、第一次世界大戦中は戦争特派員として西部戦線に派遣された。1915年にイギリス陸軍近衛師団のアイリッシュガーズ連隊へ入隊するが、フランスのソンムで戦闘中に重傷を負い除隊。除隊後はジャーナリスト、作家、秘密情報部員を経て英国大使館職員となる。退職後、46年に死去。

〔訳者〕

福井久美子（ふくい・くみこ）

英グラスゴー大学大学院英文学専攻修士課程修了。英会話講師、社内翻訳者を経て、フリーランス翻訳者。主な訳書に『無音の弾丸』、『墓地の謎を追い』（ともに論創社）、『PEAK PERFORMANCE 最強の成長術』（ダイヤモンド社）、『ハーバードの自分を知る技術』（CCCメディアハウス）などがある。

げっこうさつじん し けん
月光殺人事件

——論創海外ミステリ 216

2018年8月20日 初版第1刷印刷

2018年8月30日 初版第1刷発行

著者 ヴァレンティン・ウィリアムズ

訳者 福井久美子

装丁 奥定泰之

発行人 森下紀夫

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル

電話 03-3264-5254 振替口座 00160-1-155266

印刷・製本 中央精版印刷

組版 フレックスアート

ISBN978-4-8460-1731-6

落丁・乱丁本はお取り替えいたします